

婦人と子ども

第十二卷第六號

子供の將來を樂め

東京女子高等師範學校教授 篠田利英

樂しみを將來に求め

草花や植木のない庭は寂しい如く、子供のない家庭ほど寂しいものはあるまいと思ひます。庭の木に手入れをして、庭をだん／＼よくすることが自分の樂しみであるやうに、子供をよくし立てるといふことは親たる人の最も大なる樂しみであります。然しながら、人間は兎角、樂しみを目前に求めて、永遠の事を考へないもので、植木にしても、後になつて繁茂して來た時の恰好等を考へて手入するといふやうなことは餘りないやうであります。

庭等は目の前の樂しみでありますからこれでもよいかも知れませんが、子供の場合は決してさうではありません。寧ろ其の樂しみは後にあると思ひます。然し事實に就いては同様に目前の事ばかりに樂しんで居るのが多いやうで、例へば、小さい子供に對して、猿に藝を教へるやうに、いろ／＼なことを教へ込んで人に褒められるのを悦んだり、或は徒らに綺麗な着物を着せて、親が見て樂しみ又は人に見せて誇る、そして、さういふことが後になつて如何なる影響を持つかといふこ

とを考へないのであります。これ等は眞に子供の爲めを思ふ所以ではなく、親自らが目前の樂しみを子供から得やうとする極めて小さな考へであらうと思ふのであります。

後藤男の美心

今更ら申すまでもないことではありまするけれども、母親の心掛けが子供に及ぼす感化の、實に偉大なるに驚くものがあります。私は此の頃、或る機會で、後藤新平男の書かれた「青年訓」といふ書を見ましたが、其の書の終りに後藤男爵の自叙傳のやうなものが附して御座います。御承知の通り男は、彼の有名なる相馬事件の嫌疑者として囚窓の人となられたことがあります。それは、相馬事件のヒーローであつた錦織といふ人と、志を同ふしたといふことが嫌疑となつたのであります。其の公判に際して判事から訊問を受けました時に、後藤男は一首の歌を作つて、判事に出され

たそうであります。その歌は、

盛りには見る人多き散る花の

後を問ふこそ情なりけれ。

といふのであります。歌として價値がどれだけのものかは知れませんが、兎に角、この歌の意味は弱きを助けるのが人の情であるとの意味であつたのです。と云ふのは錦織が相馬事件の爲に獄に繋がる、やうになつた時は、非常なる借財があつたのであります。男はこれを氣の毒に思ひ、錦織の心配をなくしてやらうといふので、其の證文に連署したもので、これが嫌疑の種となつたのださうですが、何も錦織と志を同うし其の目的を達しさせる爲に働いたといふ事ではなかつたさうであります。

この美はしい義侠的精神といふものは、何から養はれて居るものかと云ひますと、男の云はるゝ處よりすれば、母様から得てゐるものに外ならな

いのであります。男の幼少の時代に於いて、常にこの歌を母から聞かされて居た爲めに、弱き者を助けるといふことが終始頭の中に働いて居たのであります。これを以つて見ても、子供の時に、知らず／＼に養はれた何ものかは、ある機會を得て必ず外界へ現はれて來るといふことが考へられて來るのであります。

私の經驗

私自身に就いて見ましても矢張り同様の經驗が思ひ出されてくるのであります。これは別に私自身を以て後藤男の場合に比較しやうとするやうな不倫を忍ばうとするものではありません。たゞ事實の上に就いて申すのでありますが、私の幼少の時分に、私の母はよく次のやうな歌を云ひ聞かせたものであります。

學問は坂に車をおす如し。

ゆだんをすれば後へもどるぞ。

勿論これも歌としての價值などの有りやうもありませんが、たゞ私に對する一の教訓として、深く自分の心に沁み込まれてゐるのであります。その爲めに長じて東京へ來まして學生々活を送るやうになつてからも、怠惰の氣を生じかけると、この歌を想ひ起しまして、幼少の時分に、よくこの歌を云ひ聞されました母の顔が、あり／＼と眼に浮び出でたのであります。すると、はゞこれではと云ふ考へが頭の中に閃めいて來て、勇を鼓して勉強するといふやうな事が屢々あつたので御座います。

私の母等は勿論學問があつた譯ではありませんが、それでも、さうした事を私の頭の中へ入れて置いて貰つた爲めに、後になつて、どれだけ自分の爲めになりましたか知れないと思ひます。若し母親が更らに知識の深い人でありまして、もつとよく私を導いてくれ、また生涯を通じて、私の主

義となるやうな透徹した觀念を、子供の時分に頭の中へ入れて置いて呉れましたならば、どの位私の生涯に利益となつたか知れないと思ふのであります。

婦人の生命

ラスキンといふ人の申しました言葉に、『婦人の純粹なる愛に依つて清められ、其の勇氣によつて勵まされ、其の智慧によつて導かれざる男子は、未だ嘗つて眞に正しき生涯を送りしことあらず。』

と云つて居るさうですが、これは獨り男子のみに限られたことではなく、女子に於いても同様であらうと思ふのであります。ラスキンの申したやうな立派な母によつて導かれた人は、必ずよき人になると云ふことは申す迄もないことで、さういふ母にあらざれば、人をして眞に正しい生涯を送らしむることは難い事であらうと思ひます。

家庭に於ける母の務めの大きなことは實にラスキンの言に盡されて居ると思はれるのである、兒童を完全に育て、將來の大なる樂しみを得るものにしやうと云ふには、矢張り婦人の純粹なる愛と、勇氣と、知慧とに依つて、適當に導かなければならぬ。それには女子をして、純粹の愛と、勇氣と、知慧とを持つ者にせなければならぬのであります。然るに世の多くの人には、矢張り、さういふ永遠のことを考へずに、眼前の小さな都合のいゝ事ばかりを考へて居るやうで、例へば高等女學校を卒業した女子を、更らに教育する目的を以つて設けられた學校がありまして、差し向き間にあふ裁縫や料理を教へる處には、多くの人が入りますけれども、さういふ業ばかりではなく、それと同時に頭をも造り、合せて技藝を授けるといふやうな完全な組織だつた學校、従つて卒業にも長き年月を要するやうな學校へは、餘り人が入らな

いのであります。こゝにも眼前の小利益のみを見て將來の大利益を考へないといふ人間の弱い一面が現はれて居ると思ふのであります。

かういふ差し向きの、間にあはせ主義ばかり取つて居ますと、ラスキンの所謂、純粹の愛を以て清め、勇氣を以つて勵まし、知慧を以つて導くことの出来る母親を得ることが困難になる譯で、従つて、次代の國民を益々善良なるものにして行かうといふ希望が薄くなると思ふのであります。

日本人と上流の子供

一體に我國の人は、永遠の事を考へる念が薄くして、眼前の利益ばかりを考へるといふことは、我々同胞の間にも常に云はれて居り、また外國人の間にも云はれて居ることでありませう。前年、大學の雇教師をして居られたミルンといふ人は、日本人は一時的の間に合せの考ばかりを持つて、後の事を考へないのは地震の多い爲めであるといふ

て居ましたが、さういふ地震其の他の天然が、幾分人の性質に影響を及ぼして居たかも知れませんが、然し、教育の仕方によつては、さういふ性質を矯め行く事が出来やうと思ふのであります。

概して云ひますと、日本の上流の家庭に於いては、子供を母親が自ら育てずして、人に任せて置くといふ風でありますので、婦人は自分の子供に對しては、十分の愛情を持つて居ますけれども、他人の子供には、其の愛情が起り悪いやうに思はれます。故に親でない他人に育てられた子供は、純粹の愛を以つて清められる機會を與へられない譯で、又、雇人等にあつては、眞に道德的の勇氣を以つて、人の子供を勵ますといふやうな事も出来ず、又、眞に知慧を以つて、善き方に導くといふやうな考へも持つて居ないのであります。さうすると、上流の人の子供は、ラスキンの言に従へば、眞に正しい生涯を送ることが難くなるといふ

結論に達しなければならぬと思はれます、眞に正しい生涯を送ることの出来ないやうな人になれば親を安心させ、眞に親を楽しませることの出来る人になれないので、こゝに至つて、親は初めて失望しやうけれども實は既に自分が失望の種を蒔い

て居るので、其の種から生へた實を收穫するに外ならないのであります。故に子供に就て眞に大なる樂を得んとする者は眼前の小樂を捨て、後を慮らなくてはなりません。

學齡 未滿 兒童教育方法の研究を望む

東京高等師範學校教授 乙 竹 岩 造

一 兒童教育の趨勢

我が國の教育も、近來だん／＼と改良進歩を來して、義務年限は延長せられ、兒童就學の歩合は増加し、今日では歐米先進國のそれと比べても、甚しき遜色を見ざるに至りましたことは、誠に喜ばしい事であると存せられます。然しながら、これは學齡兒童に對する學校教育の進歩であつて

未だ學齡に達せざる幼稚なる子供の教育、養育が我々の望むが如くに十分善く行はれて居るか、どうかと願ふと、私は未だ遺憾の點が頗る多いやうに思ふのであります。

學校教育は、申すまでもなく滿六歳から始まるものであります。偕て未だ學齡に達せざるそれ以下の子供といふものに對しては全然教育的の考